



校長室だより

令和6年度

6月4日

NO. 13

正しい「言葉の力」を学び、国語の力を身につける授業



6年国語科「模型のまち」の授業



今年の新しい国語の教科書にある「模型のまち」は、「ひろしま」を舞台にした物語です。母さんの転勤で「ひろしま」に来た六年生の亮、昔を語るものがほとんど残っていないいまちは、自分に関係のないつまらない町でした。けれど、級友の真由やその兄の圭太と出会い、圭太の「まちの模型作り」を手伝ったり夢で昔の子供たちに出会ったり、発掘調査現地見学会に参加したりして、当時のまちやそこに生きた人のことを知っていきます。

このお話の中には様々な表現の工夫がされています。授業ではそれも学びます。模型の白やビー玉の色等の色彩表現、「ひろしま」や「まち」などのひらがな表現、そして話の中で何度も出てくる「ビー玉」や「模型のまち」の反復表現、こうした表現を通して登場人物の思いや認識が変わっていく様子が表されています。国語は、言葉による見方・考え方を働かせ、国語で正確に理解し、適切に表現する資質や能力を培っていく教科、つまり人の会話や行動、様子などを「言葉」を通して読み取り、適切に理解し対応できるようにする教科とも言えます。

三十日には、岡崎市の国語科指導員を招いて、六年生「模型のまち」の授業を見てもらいました。授業では「ビー玉」「模型のまち」が表すものについてみんなで考えました。「ビー玉はかっちゃんのことを表している」「ビー玉の表現に注目したら亮の心情の変化に気づいた」「白は模型のまち、色のついた町は現実を表している」など、子供たちは深く話を読み取り、表現の効果や作品の優れたところを読み取りました。

国語の力は日常の生活で必要です。国語の力不足で起きる事件も多くあります。さらに、過去から未来へと続く人類の進化も「言葉」があったからこそできたといえます。未来を生きる秦梨っ子には、正しい国語の力をつけてほしいと願います。

○昨年度、ホタルの幼虫を放流した学校横の水路で、ホタルが見られました。たくさん見れるといいですね。
○5日には「さえずり」さんによる読み聞かせがあります。またプールの掃除もあります。いよいよ夏ですね。